平成２９年度研究推進支援プロジェクト研究成果報告書

１．研究の概要

<table>
<tr><td>プロジェクト名</td><td colspan="3">質的な授業評価を通したPDCAに関する考察―初任者教師を事例として―</td></tr>
<tr><td>プロジェクト期間</td><td colspan="3">2017年</td></tr>
<tr><td>申請代表者
(所属講座等)</td><td>坂井清隆
(教職実践講座)</td><td>共同研究者
(所属講座等)</td><td></td></tr>
<tr><td>取組方法・取組実績の概要</td><td colspan="3">本研究は，質的な授業評価が，これからの教師教育にどのように貢献できるのか，その可能性の一端を探るものである。具体的には，新規採用教師の授業実践を事例に，質的な授業評価を通した教師のPDCAに関する考察を行うことを目的とするものである。
上記の研究目的を達成するために，申請時には以下のような実施計画・方法をもって取り組むこととした。
(1) 教師の授業改善に総合的に働く諸能力の析出及び質的な授業評価の枠組みの提示
(2) 研究協力者による実践及び質的な授業評価のための分析資料（授業記録）の作成
(3) (2)の資料をもとにした実践者による質的な授業評価の実施，及び教師の実践的な「PDCAサイクル」についての考察と検討
(1)に関しては，９月に，佐藤（2015）が示した「実践的思考様式」を参考にして，授業改善に向けて総合的に働く諸能力の析出を行った。特に，即興的対応，想定外の学習者の発言に対する構えなどの諸能力に焦点化して析出した。また，重松鷹泰の「授業分析」及びコルトハーヘンのリフレクション論（ALACTモデル）に基づき，質的な授業評価の枠組みを提示した。
(2)に関しては，計画段階で依頼していた研究協力者が都合により実践ができなくなったため，近隣学校の新規採用教員（T教諭）に研究協力を依頼し，実践（9月）を行った。また，授業記録作成及び授業分析の作成を行った。
(3)に関しては，10月以降に，研究協力者と共に授業実践に対して質的な授業評価を行い，その際のインタビューやリフレクションの記述の検討・考察を通して，新規採用教員の授業改善に向かう実践的な「PDCAサイクル」の有り様を明らかにした。
本研究成果の一端を，第53回日本教育方法学会（2017年10月8日：千葉大学）で発表した。また，2018年3月には，九州教育経営学会研究紀要第24号に論文投稿を行った。</td></tr>
<tr><td>研究成果の概要</td><td colspan="3">本研究では，以下のような研究成果が得られた。
まず，質的な授業評価（授業分析）が，T教諭の授業改善に向かうPDCAサイクルを駆動させる契機になっていることが明らかになった。具体的には，教師の指導（授業における具体的な介入の場面とタイミング），子供理解（授業で表出した子供の関心事や興味と生かし方），教材研究（特に学習問題の設定）のそれぞれを関連させながら，授業改善の方途を巡って思考していることがわかった。また，これらの思考が，ALACTモデルの第3局面である「本質的な諸相への気づき」や第4局面である「行為の選択肢の拡大」の具体的な内実であることがわかった。
次に，リフレクションにおけるT教諭の意識は，具体的な授業改善の方法のみならず，T教師自身の授業観（どのような授業を目指すか）・子供観（その子供の見方・考え方）を捉え直していることが明らかになった。また，このようなリフレクションを契機にT教諭自身が，自らの授業観や子供観に常にアクセスすることで，これらは更新され，自らの特性や強み，さらには信念となって認識されていくものであることがわかった。加えて，授業の「事実」から，得られた知見は，単に理論の適用によって得られただけでなく，自分の発見に基づいた知見として，実効性が伴った授業改善の方法として生かされていくことも明らかになった。この意味においては，具体的な授業改善の方途を見出すとともに，T教諭自身の教育観・授業観の捉え直しによって，さらなる自己形成を促進させつつあることがわかる。
最後に，自治体の教員育成指標を踏まえた研修システムに対する示唆を得たことである。キャリアステージの「基礎期」において，授業の事実に基づいた質的な授業評価（授業分析）を組み込んだ研修等を実施することで，単なる教育技術の向上に留まらず，「学び続ける教師」としての信念や教育観・子供観の深化・更新が促進されていくことが期待できる。</td></tr>
<tr><td colspan="4">外部資金獲得申請及び研究成果の公表方法等について〔□（該当事項）にチェック方願います。〕</td></tr>
<tr><td>外部資金獲得申請（予定）</td><td>☑科学研究費補助金
□受託研究費
□その他
（　　）</td><td>研究成果の公表方法
（予定）</td><td>☑学会（(国内)・国外）：
□新聞・図書・雑誌論文等：
☑その他：学会論文投稿</td></tr>
</table>